

ある出版社から「お金（硬貨）をキャラクターにした子供向け絵本はできないでしょうか？」という依頼が来た。十円玉や百円玉をかわいいキャラにできないかというのだ。

お金は小さな子でもみんな知っているから、親しみを持つのではないかとこのうのだ。

だがそれらには当然金額という価値がついて回る。どうしても高額な方がエライとか、そういう話になりがちだ。それは子供に対して、現実過ぎて夢の無い話になってしまう。そこを何とかできないか、というのだ。

ボクは机の上に一円玉から五百円玉まで並べて、手に取ったり裏返したり、改めてじっくり見た。そして、これらが家族のように思えてきた。

五百円はサラリーマンパパ、百円は老人ホームで働くママ。五十円はオシャレが気になる女子高生で、十円はサッカー好きな小学生のお兄さん。そう決めるとそんな風に見えてくる。楽しくなってきた。ここで気がついたのだが、一円玉と五円玉は、自動販売機に入れても戻ってくる。そこでも思いついた。自販機を社会に見立て、そこに参加しない一円を幼稚園入園前の子ども、五円を引退して家にいるおじいさんにしたらどうか。

このおじいさんと幼児を主人公にしよう。

五円はゴエジイ、一円は四兄弟、タロウ、ジロベ、サンタ、タマミ。主人公はこの五人だ。ゴエジイは、七十歳になった時、幾つもの特殊能力が目覚めるが、それを孫たちの夢のためだけに使お



絵・江口修平

お金の家族

久住昌之

うと考える。他の家族に教えると、皆自分の利益や成績や人気や便利のために、それを利用したがると思ったからだ。

お話はその四人が朝、会社やパートや学校に行ってしまったあとの家で始まる。でもゴエジイは孫たちに「このことは他の人（家族）には内緒だぞ」と言っていて、いろいろな場所に冒険に連れて行ってくれる。食べられる花の木、地底洞窟の温泉、お化け屋敷、恐竜島。海にはカードの海賊も出そう。

ゴエジイの五円玉の穴は望遠鏡になり、水や光線を発射する。模様の若葉は取り外して、一円玉たちの背中に付けると、空を飛ぶことができる。

ボク自身、普段、金銭の話は苦手だ。でも、こうして見つめ直していくうち、硬貨に対して長いこと忘れていた親しみを思い出した。小学校の時、百円玉のデザインが今のものに変わった。新硬貨は「0」の文字の上下が少し斜めにカットされている字体で、「カッコヨクになったな」と思った。

五円玉は、よく見ると工業農業水産業のイメージがデザインされていて、さらに双葉は日本の山林を思わせ、物知りの老賢者の雰囲気もある。一円玉の軽さとシンプルなデザインも、無垢な感じがして、かわいい。

それぞれのコインに、個性や、味わいが見えてくる。一家九枚を並べてみると、昔の大家族のように見えて、なんだかのんびり楽しそうだ。小銭入れは彼らの寝袋のようだ。

くすみ・まさゆき●1958年東京都生まれ。法政大学社会学部卒。1999年、実弟・久住卓也氏と組んだマンガユニット「Q.B.B.」名義で描いた『中学生日記』で、第45回文藝春秋漫画賞受賞。1997年、谷口ジロー氏と組んで描いたマンガ『孤独のグルメ』は、現在イタリア他計10カ国で翻訳出版されている。2012年にTVドラマ化され、現在 season5。劇中全ての音楽の制作演奏をし、脚本を監修、最後にレポーターとしても出演。弟の久住卓也氏との共作児童書『1円くんと五円じい』（ポプラ社）はシリーズ5巻。

